

【安藤昌益研究の最前線（その14）】

安藤昌益の真営道医学を伝承した江戸の町医・
川村真斎による処方収集書『真斎聚方』における
「本草之部 附方」の処方群〔・**【X】**＝**No.210～333**〕は、
『本草綱目』の【附方】からの記載であることの考証、
および『真斎聚方』の全体的な構成について
——**【X-4】**『真斎聚方』〔**No.254～266**〕
〔『本草綱目』卷十七・下〔草部〕～卷二十一〔草部〕〕
——さらに、真斎の「筆写・抄出方法」から
『真斎謾筆』と稿本『自然真営道』との
内容的同一性について考える

和田耕作

（KOSAKU WADA）

◎・はじめに・◎

安藤昌益の真営道医学を継承した川村真斎（1785～1852）による処方収集書『真斎聚方』（内藤記念くすり博物館蔵本）は、浩瀚な著作である。

本稿では、本誌「PHN」35号に引き続いて、No.115以降の処方群と、それらに関連すると思われる『名家方選』三部作の処方群についての考証と考察を進める予定であったが、今回は、急遽予定を変更して、『真齋聚方』の「最終見出し」であるところの「本草之部 附方」〔No.210～333〕についての考証と考察を行うことにした。

「本草之部 附方」は、それまでの記述とは、大きく異なっており、その「出典」書目数も膨大であり、何による記載であるのかが、これまで不明であった。それは、『真齋聚方』における「最後の難関」と思われた。

しかし、実際に調査をしてみると、この問題は、意外にもすぐさま解決したのである。すなわち、「本草之部 附方」は、『本草綱目』の【附方】などからの記載であることが、このたび明らかとなった。

『本草綱目』は、各薬物などを、

【釈名】【集解】【正誤】【修治】【気味】【主治】【發明】【附方】

の八項目にわけて記述している。

真齋は、最後の【附方】の処方群の中からを選んで記載していることが明らかになった。一部には、【發明】や【修治】の項目からも記載しているところもある。

『真齋聚方』「本草之部 附方」には、『本草綱目』の書名も、処方のある巻数や「薬物名」などの項目も記されていない。したがって、本稿では【附方】などのある『本草綱目』の巻数や分類項目、さらには「薬物名」などをも示して、『真齋聚方』「本草之部 附方」の内容構成が明確となるように記述することとした。

今回は、その第4回目であり、【X-4】『真齋聚方』〔No.254～266〕

まで、すなわち、『本草綱目』の巻十七・下〔草部〕～二十一〔草部〕に相当する部分である。

◎・『真齋聚方』の全体的構成について・◎

このたび、「本草之部 附方」の「出典」が判明したことにより、『真齋聚方』の全体的な構成を、次のように把握することができるようになった。

▼【第一部】・・・『真齋聚方』・「第一編」▼

・『真齋聚方』〔No.1～36〕

・この巻頭部分は、『類聚方集覧』などから記載によるものであり、

おもに『真齋方記』へと増補されるところのものである。

〔『PHN』32号（2018年8月号）を参照〕

▼【第二部】・・・『真齋聚方』・「第二編」▼

・『真齋聚方』〔「A」=No.37～115〕+〔「B」=No.116～209〕

・次は、各医書群と『名家方選』三部作からの処方群である。

〔「A」については、『PHN』33号（2018年9月号）～35号

（2018年11月号）を参照。〕

〔「B」については、今後、考証の予定であるが、その一部であ

る安藤昌益と山脇東洋の処方群については、『PHN』30号

（2018年4月号）・31号（2018年5月号）を参照のこと。〕

・この「第二編」については、考証をさらに進めた上で、その構成について再考する予定である。

▼〔第三部〕・・・『真齋聚方』・「第三編」▼

・『真齋聚方』〔「A」=No.210~266〕+〔「B」=No.266~333〕・

・『真齋聚方』の「第三編」と言える「本草之部 附方」は、この
たび『本草綱目』【附方】などからの記載であることが明らかにな
ったのである。

・『真齋聚方』の「本草之部 附方」は、分量的には、『真齋聚方』
の中の三分の一を超えており、上記の「第一編」と「第二編」
を合わせて、仮に『真齋聚方』の「前編」とすれば、明らかに
『真齋聚方』の「後編」と呼んでよいものである。

〔「A」については、『PHN』36号（2019年1月号）～『PHN』
39号（2019年4月号）を参照のこと〕

〔「B」については、今後、考証の予定である。〕

●・【出典】の考証のための文献一覧・●

・『新註校定・国譯本草綱目』（第六冊）〔草部〕

（昭和49年12月、新註増補版、春陽堂書店刊）〔和田文庫蔵〕

〔以下、『国訳本草綱目』（第六冊）と略記する。〕

・〔明〕李時珍『本草綱目』（全二冊）

（1986年5月、商務印書館香港分館刊）〔和田文庫蔵〕

・『補註・本草綱目』（上巻、多紀安元遺稿、多紀鶴郎・永島忠共纂）

（大正四年十月、半田屋医籍商店刊）〔和田文庫蔵〕

・『補註・本草綱目』（下巻ノ一、多紀安元遺稿、多紀鶴郎・永島忠
共纂）

（大正五年十一月、半田屋医籍商店刊）〔和田文庫蔵〕

▼凡例▼

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○〔金〕○・・・・・・・・・・・・・・〔『本草綱目』の薬物名〕

【附方】・・・・・・・・（No.210）・・・・・・〔『真齋聚方』におけるNo.〕

〔1／5〕・・・・〔『本草綱目』の5処方の中の1処方を記載〕

・「輕粉破口」・・・・・・・・。。。。「外台」〔A〕〔外台秘要〕〔B〕

〔A〕＝『真齋聚方』における略書名。

〔B〕＝『本草綱目』を参照したわかりやすい書名。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・「▲」は、『真齋聚方』に出典が欠落しているもの。

・「——」は、『本草綱目』に出典の記載なきもの。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

◎・『真齋聚方』「本草之部 附方」の処方群の「出典」

である『本草綱目』【附方】との考証と考察・◎

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

▼《I.》▼

▼『本草綱目』卷十七・下「草部」・・・「草之六」（毒草類）より▼

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○〔烏頭〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.10）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.254）〔3／52〕

・①「膝風作痛」・・・・・・・・「扶寿」〔扶寿方〕

・②「遠行脚腫」・・・・・・・・「経験」〔経験〔方〕〕

・①、②の全文に傍点（左側）あり。

・③「老人遺尿」・・・・・・・・「普濟」〔普濟〔方〕〕

○〔白附子〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.26）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.254）〔2／12〕

・①「小兒吐逆」・・・・・・・・「保幼」〔保幼大千方〕

・②「慢痺驚風」・・・・・・・・「楊氏」〔楊氏家藏方〕

○〔虎掌・天南星〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.30）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.254～255）〔8／39〕

・①「中風口禁」・・・・・・・・「▲」〔経験方〕

・②「小兒口禁」・・・・・・・・「——」

・③「小兒風痰」・・・・・・・・「心鑑」〔全幼心鑑〕

・④「小兒解顛」・・・・・・・・〔小兒直訣〕

・真齋の解説文は、「小兒解顛」の途中の「塞者」のところから、この前の処方「初生貼顛」の文の「塞者」のところへと飛んでおり、出典の「危氏」も「初生貼顛」のものである。真齋の転記ミスである。

・⑤「解頤脱臼」・・・「医説」〔医説〕

・⑥「小児口瘡」・・・「集効」〔集効方〕

・⑦「痰瘤結核」・・・「済生」〔済生方〕

・⑧「身面疣子」・・・「簡易」〔簡易方〕

○〔半夏〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.48）〕・

【附方】・・・（No.255～256）〔18／68〕

・①「風痰喘急」・・・「局方」〔和剂局方〕

・②「小児痰熱」・・・「摘玄」〔摘玄方〕

・③「停痰留飲」・・・「局方」〔和剂局方〕

・④「老人虚秘」・・・「局方」

・⑤「骨硬在咽」・・・「外台」〔外台秘要〕

・⑦「小児顛陷」・・・「——」

・⑧「面上黒氣」・・・「▲」〔摘玄方〕

・⑨「盤脹生産」・・・「良方」〔婦人良方〕

・⑩「産後運絶」・・・「肘後」〔肘后方〕

・⑪「小児驚風」・・・「直指」〔直指方〕

・⑫「卒死不寤」・・・「——」

・「南宮夫人」とあるのは、「南岳夫人」が正しい。

・⑬「五絶急病」・・・「子母」〔子母秘録〕

・⑭「吮〔吹〕奶腫痛」・・・「經驗」〔劉長春經驗方〕

・⑮「打撲瘀痕」・・・「永類」〔永類鈴方〕

・⑯「遠行足趼」・・・「集簡」〔集簡方〕

・⑰「金刃不出」・・・〔李筌太白經〕

・ここに出典として「本事」とあるのは誤り。「本事」は、
次の⑱の出典である。

・⑱「飛虫入耳」・・・「本事」〔本事方〕

○〔射干〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.78）〕・

【附方】・・・（No.256）〔1／10〕

・①「咽喉腫痛」・・・「袖珍」〔袖珍方〕

○〔玉簪〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.88）〕・

【附方】・・・（No.256）〔1／5〕

・①「婦人断産」・・・「摘玄」〔摘玄方〕

・次にある「覆盆葉・・・」の一文は、

○〔覆盆子〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.167）〕・

の処方「臙瘡潰爛」のものである。これは、おそらくこの処方の

前の処方の出典「摘玄方」を、上記の①「婦人断産」の出典

「摘玄方」と間違えて、記載したのであろう。

しかし、「卷十七・下」から「卷十八・上」へと、大きく飛び越えてのミスは、これまでにないものである。

この後は、次節に見るように、

○〔覆盆子〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.167）〕・

の「覆盆葉・・・」の一文から、

○〔菟絲子〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.145）〕・

の①「婦人横生」の処方へと、遡及して記載している所をみる

と、ここにおいて一丁分の欠落があると考えすることはできないであろう。

●【考察1】●

上記にみるように、「卷十七・下」から「卷十八・上」へと、大きく飛び越えての転記ミスは、これまでにないものである。

▼《Ⅱ.》▼

▼『本草綱目』卷十八・上「草部」・・・「草之七」（蔓草類）より▼

○〔菟絲子〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.145）〕・

○○〔子〕・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.148）〕・

【附方】・・・（No.256）〔1／11〕

・①「婦人横生」・・・「聖恵」〔聖恵方〕

○○〔苗〕・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.152）〕・

【附方】・・・（No.256）〔1／3〕

・①「面瘡粉刺」・・・「肘後」〔肘後方〕

○〔懸鉤子〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.173）〕・

【附方】・・・（No.256）〔2／2〕

・①「血崩不正」・・・「乾坤」〔乾坤生意〕

・②「崩中痢下」・・・「千金翼」

○〔使君子〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.178）〕・

【附方】・・・（No.256）〔3／6〕

・①「小兒脾疳」・・・「儒門」〔儒門事親〕

・②「小兒蛔痛」・・・「心鑑」〔全幼心鑑〕

・③「虫牙疼痛」・・・「集簡」〔集簡方〕

○〔木鼈子〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.181）〕・

【附方】・・・・・・（No.256）〔2／20〕

・①「酒疸脾黄」・・・・・・「済急」〔済急方〕

・②「水瀉不止」・・・・・・「寿精」〔寿精方〕

○〔馬兜鈴〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.189）〕・

○○〔独行根〕・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.192）〕・

【附方】・・・・・・（No.257）〔1／5〕

・①「惡蛇所傷」・・・・・・「袖珍方」

○〔榼藤子〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.194）〕・

【附方】・・・・・・（No.257）〔1／4〕

・①「喉痺腫〔痛〕」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

○〔牽牛子〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.199）〕・

【附方】・・・・・・（No.257）〔6／38〕

・①「小兒腹脹」・・・・・・「鄭氏」〔鄭氏小兒方〕

・②「面上風刺」・・・・・・「摘玄」〔摘玄方〕

・③「面上粉刺」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・④「面上雀斑」・・・・・・「摘玄」〔摘玄方〕

・⑤「馬脾風病」・・・・・・「心鑑」〔全幼心鑑〕

・⑥「小兒夜啼」・・・・・・「生々」〔生生編〕

○〔紫葳〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.220）〕・

【附方】・・・・・・（No.257～258）〔5／13〕

・①「大風痼疾」・・・・・・「儒門事親」

・②「鼻上酒皴」・・・・・・「百一選方」「楊氏家藏方」

・末尾の小文字部分「楊氏家藏方・・」の文も原文のもの。

・③「走皮趨瘡」・・・・・・「直指」〔直指方〕

・④「耳卒聾閉」・・・・・・「斗門」〔斗門方〕

・⑤「女經不行」・・・・・・「胎産」〔胎産方〕

○〔當実・牆藤〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.225）〕・

○○〔根〕・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.227）〕・

【附方】・・・・・・（No.258）〔8／12〕

・①「消渴尿多」・・・・・・「千金」〔千金方〕

・②「小便失禁」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・③「少小尿床」・・・・・・「外台」〔外台秘要〕

・④「小兒疳痢」・・・・・・「千金」〔千金方〕

・⑤「口咽痛痒」・・・・・・「普濟」〔普濟方〕

・⑥「口舌糜爛」・・・・・・「千金」〔千金方〕

・⑦「筋骨毒痛」・・・・・・「――」

・ここに記載されている「鄧筆峰・・・」の文は、原文の後半のも
のであり、前半の文章は省略されている。

・⑧「骨硬不出」・・・・・・「外台」〔外台秘要〕

○〔栝樓〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.231）〕・

○○〔実〕・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.233）〕・

【附方】・・・・・・（No.258）〔1／20〕

・①「面黒令白」・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

○○〔根〕・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.240）〕・

【附方】・・・・・・（No.258～259）〔8／24〕

・①「消渴飲水」・・・・・・〔千金方ほか〕

・原文には、(1)「千金方・・・」、(2)「肘後方・・・」、(3)「外
台秘要・・・」、(4)「聖恵方・・・」、(5)「又玉壺丸用・・・」の5
つの文があるが、(2)・(3)・(4)の文が省略されている。出典
として「聖恵」とあるのは、(4)からの記載であるが、これを(5)
の文の末尾に出典としているのは正確ではない。

・②「黒疸危疾」・・・・・・「簡便」〔簡便方〕

・③「小兒熱病」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・④「虚熱欬嗽」・・・・・・「集簡」〔集簡方〕

・⑤「産後吹乳」・・・・・・〔永類方〕

・この出典に「産乳」とあるのは、次の「乳汁不下」のもので
真斎の記載ミスである。

・⑥「乳汁不下」・・・・・・「産乳」〔楊氏産乳〕

・⑦「箭鏃不出」・・・・・・「海上」〔海上方〕

・⑧「鍼刺入肉」・・・・・・「海上」

○〔王瓜〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.245）〕・

○○〔根〕・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.248）〕・

【附方】・・・・・・（No.259）〔7／12〕

・①「小兒發黃」・・・・・・「図経」〔蘇頌図経〕

・②「黄疸変黒」・・・・・・「——」

・③「小便不通」・・・・・・「肘后」〔肘後方〕

・④「大便不通」・・・・・・「肘后」

・⑤「乳汁不下」・・・・・・「産乳」〔楊氏産乳方〕

・⑦「面上疥瘡」・・・・・・「肘后」〔肘後方〕

○○〔子〕・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.250）〕・

【附方】・・・・・・（No.259）〔2／8〕

・①「消渴飲水」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・②「傳尸勞瘵」・・・・・・「神書」〔十藥神書〕

○〔葛〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.251）〕・

○○〔葛根〕・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.253）〕・

【附方】・・・・・・（No.259）〔6／23〕

・①「妊娠熱病」・・・・・・「類要」〔傷寒類要〕

・②「辟瘴不染」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・③「金創中風」・・・・・・「▲」〔応利方〕

・文の後半部分と出典が省略されている。

・④「酒醉不醒」・・・・・・「千金」〔千金方〕

・⑤「諸藥中毒」・・・・・・「肘後」〔肘後方〕

・⑥「解中鳩毒」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

○〔天門冬〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.263）〕・

【附方】・・・・・・（No.259～260）〔5／17〕

・①「虚勞体痛」・・・・・・「千金」〔千金方〕

・②「肺勞風熱」・・・・・・「食療」〔孟詵食療〕

・③「婦人骨蒸」・・・・・・「機要」〔活法機要〕

・④「面黒令白」・・・・・・「聖濟」〔聖濟總録〕

・⑤「口瘡連年」・・・・・・「▲」〔齊徳之外科精義〕

○〔百部〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.276）〕・

【附方】・・・・・・（No.260）〔5／10〕

・①「暴欬嗽」・・・・・・「張文仲方」

「続千金〔十全〕方」「普濟方」

・②「小兒寒嗽」・・・・・・「小兒」〔錢乙小兒方〕

・③「三十年嗽」・・・・・・「千金」〔千金方〕

・④「百虫入耳」・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

・⑤「熏衣去虱」・・・・・・「經驗」〔經驗方〕

○〔何首烏〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.280）〕・

【附方】・・・・・・（No.260～261）〔8／16〕

・①「皮裏作痛」・・・・・・「經驗」〔經驗方〕

・②「自汗不止」・・・・・・「集簡」〔集簡方〕

・③「腸風臟毒」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・④「小兒龜背」・・・・・・「——」

・⑤「破傷血出」・・・・・・「雜興」〔筆峯雜興方〕

・⑥「瘰癧結核」・・・・・・「斗門」〔斗門方〕

・⑦「大風癘疾」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

- ・⑧「疥癬満身」・・・・・・「博濟」〔王袞博濟方〕

●【考察2】●

一部に省略や転記ミスが見られる。

▼《Ⅲ.》▼

▼『本草綱目』卷十八・下「草部」・・・「草之七」（蔓草類）より▼

○〔草薺〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.295）〕・

【附方】・・・・・・（No.261）〔1／5〕

・①「白濁頻数」・・・・・・「——」

○〔菝葜〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.299）〕・

【附方】・・・・・・（No.261）〔1／5〕

・①「小便滑数」・・・・・・「儒門」〔儒門事親方〕

○〔白斂〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.310）〕・

【附方】・・・・・・（No.261）〔6／13〕

・①「面鼻酒皴」・・・・・・「御藥」〔御藥院方〕

・②「面生粉刺」・・・・・・「肘后方」

・この文と出典（「談埜」）は、ともに次にある処方「凍耳成瘡」
のものである。ともに「白斂」ではじまる文のための転記ミス
であろう。

・③「湯火灼爛」・・・・・・「外台」〔外台方〕

・④「諸物硬咽」・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・⑤「鉄〔鉄〕刺諸硬」・・・・・・「聖恵」

・⑥「刺在肉中」・・・・・・「聖恵」

○〔山豆根〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.322）〕・

【附方】・・・・・・（No.261）〔4／13〕

・①「頭風熱痛」・・・・・・「備急」〔備急方〕

・②「頭上白眉」・・・・・・「備急」

・③「牙齦腫痛」・・・・・・「備急」

・④「喉中発癰」・・・・・・「永類」〔永類方〕

○〔威靈仙〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.336）〕・

【附方】・・・・・・（No.261）〔3／20〕

・①「痔瘡腫痛」・・・・・・「外科精義」

・②「諸骨硬咽」・・・・・・「——」

・最初の文のみを記載し、次の「乾坤・・・」の文と「聖濟録・・・」

の二つの文を省略している。処方の基本は、最初の文で十分なのであろう。

・③「痘瘡黒陷」・・・・・・・・「儒門」〔儒門事親〕

○〔茜草〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.344）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.261～262）〔4／11〕

・①「解中蠱毒」・・・・・・・・「小品」〔陳延之小品方〕

・②「黒髭烏髮」・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

・③「脱肛不收」・・・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

・④「預解瘡疹」・・・・・・・・「奇効」〔奇効良方〕

○〔防已〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.353）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.262）〔2／12〕

・①「肺痿咯血」・・・・・・・・「録驗」〔古今録驗〕

・②「解雄黄毒」・・・・・・・・「——」

○〔通草〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.365）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.262）〔2／3〕・

・①「心熱尿赤」・・・・・・・・「錢氏」〔錢氏方〕

・②「婦人血氣」・・・・・・・・「孟詵」〔孟詵本草〕

○〔釣藤〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.368）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.262）〔2／3〕

・①「小兒驚熱」・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

・②「卒得癰疾」・・・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕

○〔葦草〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.388）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.262）〔3／9〕

・①「小便膏淋」・・・・・・・・「——」

・ここに出典として「范汪」とあるが、これはこの前にある処方

「小便石淋」の出典である。

・②「遍体癩瘡」・・・・・・・・「独行」〔独行方〕

・③「烏癩風瘡」・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

○〔木蓮〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.399）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.262）〔2／8〕

・①「腸風下血」・・・・・・・・「家蔵」〔楊倓家蔵方〕

・②「乳汁不通」・・・・・・・・「集簡」〔集簡方〕

○〔忍冬〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.408）〕・

【附方】・・・・・・・・（No.262～263）〔3／18〕

・①「一切腫毒」・・・・・・・・「積善」〔積善堂方〕

・②「脚氣作痛」・・・・・・・・「易簡」〔易簡方〕

- ・③「忍冬膏」・・・「乾坤」〔乾坤秘韞〕

●【考察3】●

ここでも一部の省略や転記ミスが見られる。

▼《Ⅳ.》▼

▼『本草綱目』卷十九「草部」・・・「草之八」（水草類）より▼

○〔澤瀉〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.443）〕・

【附方】・・・（No.263）〔2／6〕

・①「水湿腫脹」・・・「保命」〔保命集〕

・②「支飲苦冒」・・・「仲景（澤瀉湯）」

・後半の「深師方・・・」の文が省略されている。

○〔羊蹄〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.452）〕・

○○〔根〕・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.454）〕・

【發明】の項から、【頌曰】のところの最初の文を記載している。

【附方】・・・（No.263）〔2／13〕

・①「頭上白禿」・・・「肘後」〔肘后方〕

・「独根羊蹄」の後の途中の9文字分が省略されている。

・②「癰久不瘥」・・・「簡要」〔簡要濟衆方〕

・「簡要濟衆方」からの最初の文のみが記載されている。次にあ

る「永類方・・・」「千金方・・・」の2つの文が省略されている。

○〔菖蒲〕○・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.462）〕・

【發明】の項から、【楊士瀛曰】のところの全文を記載している。

【附方】・・・（No.263）〔7／27〕

・①「健忘益智」・・・「千金」〔千金方〕

・「方寸匕」の次から、この前にある処方「服食法」の「方寸匕」

とある文に飛んで記載されている。明らかな転記ミスである。

出典は、ともに「千金方」である。

・②「卒中客忤」・・・「肘後」〔肘后方〕

・③「蚤虱入耳」・・・「聖濟」〔聖濟録〕

・④「頭瘡不瘥」・・・「法天生意」

・⑤「露岐便毒」・・・「要訣」〔證治要訣〕

・⑥「熱毒湿瘡」・・・「衍義」〔本草衍義〕

- ・⑦「陰汗湿痒」・・・・・・・・「▲」〔済急仙方〕
- 〔香蒲・蒲黄〕○・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.476）〕・
- 〔蒲黄〕・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.479）〕・
- 【附方】・・・・・・・・（No.263～264）〔6／25〕
- ・①「舌脹満口」・・・・・・・・「——」
- ・【附方】の前にある【發明】の項の「時珍曰」には、「本事方」
「芝隠方」などからの処方が記されている。
- ・②「重舌生瘡」・・・・・・・・「千金」〔千金方〕
- ・③「吐血唾血」・・・・・・・・「簡要」〔簡要済衆方〕
- ・④「脱肛不收」・・・・・・・・「子母」〔子母秘録〕
- ・⑤「胞衣不下」・・・・・・・・「▲」〔集驗方〕
- ・⑥「産後下血」・・・・・・・・「産宝」〔産宝方〕
- 〔菰〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.483）〕・
- 【附方】・・・・・・・・（No.264）〔1／2〕
- ・①「毒蛇傷嚙」・・・・・・・・「外台」〔外台秘要〕
- 〔水萍〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.488）〕・
- 【附方】・・・・・・・・（No.264）〔6／25〕
- ・①「大腸脱肛」・・・・・・・・「危氏」〔危氏得效方〕
- ・②「汗斑〔斑〕癰風」・・・・・・・・「袖珍」〔袖珍方〕
- ・③「少年面皤」・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕
- ・最初の文「外台・・・」が省略されている。「普濟方・・・」の
説明の方がより具体的なためであろう。
- ・④「粉滓面●〔黒の右に干〕」・・・・「聖恵」〔「聖恵方」〕
- ・⑤「大風癘疾」・・・・・・・・「▲」〔十便良方〕
- ・「博案 観音聖号云云、一為信薬食養乎」との、真斎の按文が
ある。これは、「・・・常に観世音の聖号を唱へる。猪、魚、鶏、
蒜を忌む。」〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.494）〕という本文に
対しての真斎の感想である。
- ・後半の「又方・・・」の文が省略されている。
- ・⑥「焼烟去蚊」・・・・・・・・「孫真」〔孫真人方〕
- 〔菴菜〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.501）〕・
- 【附方】・・・・・・・・（No.264）〔1／4〕
- ・①「毒蛇螫傷」・・・・・・・・「肘後」〔肘后方〕
- 〔蓴〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.505）〕・
- 【附方】・・・・・・・・（No.264）〔3／3〕

- ・①「一切癰疽」・・・・・・・・・・「保生」〔保生餘録〕
- ・②「頭上惡瘡」・・・・・・・・・・「保幼」〔保幼大全〕
- ・③「数種疔瘡」・・・・・・・・・・「経験」〔経験良方〕

○〔海藻〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.511）・

【附方】・・・・・・・・（No.264～265）〔4／5〕

- ・①「海藻酒」・・・・・・・・・・「范汪」〔范汪方〕
- ・②「瘰癧初起」・・・・・・・・・・「丹溪」〔丹溪方〕
- ・③「項下瘰癧」・・・・・・・・・・「肘後」〔肘後方〕
- ・④「蛇盤瘰癧」・・・・・・・・・・「危氏」〔危氏得效方〕

○〔昆布〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.516）・

【附方】・・・・・・・・（No.265）〔3／4〕

- ・①「瘰癧結核」・・・・・・・・・・「聖恵」〔「聖恵方」〕
- ・②「項下五瘰」・・・・・・・・・・「聖恵」
- ・③「項下卒腫」・・・・・・・・・・「外台」〔外台秘要〕

●【考察4】●

ここでも、一部の省略や転記ミスが見られる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

▼《V.》▼

▼『本草綱目』卷二十「草部」・・・「草之九」（石草類）より▼

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○〔骨碎補〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.528）・

【附方】・・・・・・・・（No.265）〔4／4〕

- ・①「虚気攻牙」・・・・・・・・・・「靈苑方」

・真斎は、全文に傍点を付して強調している。最後の「有神」の
文字が「有補」のように書かれているのは、転記ミスである。

- ・②「風虫牙痛」・・・・・・・・・・「聖濟」〔聖濟総録〕
- ・③「病後落髮」・・・・・・・・・・「——」
- ・④「腸風失血」・・・・・・・・・・「▲」〔仁存方〕

○〔石葦〕○・・・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.532）・

【附方】・・・・・・・・（No.265）〔3／5〕

- ・①「小便淋痛」・・・・・・・・・・〔聖恵方〕

・出典に「聖濟」とあるが、異本では「聖恵」である。

『補註・本草綱目』では、「聖恵」である。

- ・②「便前有血」・・・・・・・・・・「普濟」〔普濟方〕

・③「氣熱欬嗽」・・・・・・「聖濟」〔聖濟録〕

○〔景天〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.541）・

【附方】・・・・・・（No.265）〔2／7〕

・①「漆瘡作痒」・・・・・・「外台」〔外台秘要〕

・②「眼生花翳」・・・・・・「▲」〔聖惠方〕

○〔石胡荽〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.546）・

【附方】・・・・・・（No.265）〔1／7〕

・①「●〔口ヘンに畜〕鼻去翳」・・・「啓微」〔倪氏啓微集〕

○〔螺曆草〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.550）・

【附方】・・・・・・（No.265～266）〔3／7〕

・①「吐血衄血」・・・・・・「朱氏」〔朱氏集驗方〕

・②「手指腫毒」・・・・・・「寿域」〔寿域神方〕

・③「蛇纏惡瘡」・・・・・・「——」

○〔酢漿草〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.552）・

【附方】・・・・・・（No.266）〔6／8〕

・①「小便血淋」・・・・・・「百一」〔百一選方〕

・②「諸淋赤痛」・・・・・・「沈存」〔沈存中靈苑方〕

・③「二便不通」・・・・・・「摘玄」〔摘玄方〕

・④「癰瘡作痒」・・・・・・「永類」〔永類方〕

・⑤「蛇虺螫傷」・・・・・・「崔氏」〔崔氏方〕

・⑥「牙齒腫痛」・・・・・・「▲」〔節齋医論〕

○〔地錦〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.556）・

【附方】・・・・・・（No.266）〔2／12〕

・①「金瘡出血」・・・・・・「危氏」〔危氏得效方〕

・②「惡瘡見血」・・・・・・「危氏」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

▼《VI.》▼

▼『本草綱目』卷二十一「草部」・・・・・・「草之十」（苔類）より▼

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○〔卷柏〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.588）・

【附方】・・・・・・（No.266）〔1／2〕

・①「大腸下血」・・・・・・「仁存」〔仁存方〕

○〔馬勃〕○・・・・・・〔『国訳本草綱目』（第六冊、p.594）・

【附方】・・・・・・（No.266）〔3／9〕

- ・①「咽喉腫痛」・・・・・・・・・・「聖恵」〔聖恵方〕
- ・②「走馬喉痺」・・・・・・・・・・「経験」〔経験良方〕
- ・③「声失不出」・・・・・・・・・・「摘玄」〔摘玄方〕

◎・むすび・◎

このたび、『真斎聚方』「本草之部 附方」の各処方が、『本草綱目』の各薬物の【附方】からの記載であることが判明したことにより、『真斎聚方』の全体的構成が、ここに初めて明らかになった。

そして、すでに述べたように、真斎は、『真斎聚方』「本草之部 附方」の各処方を、『本草綱目』の各薬物の【附方】の項から、基本的に「原文」そのままの内容で記載している。

それは、これまでの真斎の「筆写・抄出方法」を踏襲しているものである、と言えるであろう。

各処方の抄出については、真斎の臨床家としての必要性から選ばれたものと思われる。

『真斎聚方』「本草之部 附方」もまた、『本草綱目』の各薬物の【附方】の項から臨床的に参考となる処方群を抄出して、臨床研究に役立

てることが目標であった。その「按文」の一つひとつの内容が、それを物語っている。

いずれにしても、『本草綱目』の各薬物の【附方】を、これほど多く記載した真斎の研究態度には、感服せざるを得ない。

以上は、「第1回目の考証」における「むすび」であり、私はこの時点で『真斎聚方』「本草之部 附方」の全体的な評価を急ぐ必要はないと思う。その全体的な評価は、今後、さらなる「考証と考察」を進めてからでも十分であろう。

上記の「むすび」については、今回の「第4回目の考証」においても基本的に変わりはないと言えるであろう。今回は、省略されている文章や転記ミスなどが、少しく目立つという印象を受けるが・・。

真斎が記載している処方群には、同名の処方も少なくない。このような処方記載の傾向を探ることは、真斎の医学的な関心を見る上にも大切なことがらである。

[2019年4月25日、PHN（思想・人間・自然）、第39号、PHNの会発行]

[2019年4月25日、和田耕作（C）、無断転載厳禁]
